

## 書籍のあとがきと読者からの読後感想

我々日本人は、日本文化の色合いが強い情感豊かな日本語と、「物、事、考え」を伝える明確な日本語を使い分ける能力を持っている筈です。ただ、そのことを意識していないだけです。日本人の英語苦手も悲観することはありません。

例えば学習科目によって文章の書き方は違います。理科実験のレポートは「見たまま、ありのまま」を厳密に書くことで、情感が入り込む余地はありません。社会科のレポートは、与えられたテーマに対して、筋道を立てて分析します。そして自分の考えを正直に述べていきます。国語の作文は、情感ある文章で読み手を引き込む文才が求められます。それを鍛錬するのが国語教育です。小中高等学校で、このことを意識した教育をすれば目的に合った文章が書けるようになります。

外国語の勉強は、日本語の特性を理解するには有効と考えています。日本語は「情感」の表現には向いていますが「論理的表現」には向いていないことはお分りだと思います。外国語の中でも特に英語は「論理的表現」に適した構造をもっていますから論理力を鍛えるには英語を学ぶのが手っ取り早いです。

論理力の基本は「なぜ」を追求することです。にも拘わらず、英語は「なぜ」そのような表現方法をするのか、という学生の質問があった場合、教師は満足のかく答えを与えられるでしょうか。

いま中学、高校、大学(英文科を除く)の英語教育で使われる英語テキストの多くは英語文学書と見受けられます。英語文学書は、英米の文化に深く根差したもので、大学の英文科で勉強している学生には適しているかも知れません。しかし、自然科学、社会科学、といった、普遍文明を対象として使われる英語を修得しなければならない一般学生にとって適切でないと思います。

グローバル社会で求められることは、まず世界との橋渡しができる言語です。橋を渡り終えたら、こんどは日本文化に根ざした日本語が必要となります。世界の

人が持てない、相手の気持ちを思いやる美しい日本語が見直され日本人が尊敬されるに違いありません。そうなるために日本人は、まず第二母語としての「文明日本語」を持つのではないか、という提唱です。

いま学生の論理力の無さが問題になっています。たとえば理工系大学で使われている英語の教科書に「米国特許明細書」を使う、といアイデアはいかがでしょうか。「米国特許明細書」は極めて論理的に構成(展開)されており、その文章は明快に記述されていますから論理力も向上するはずです。

さらに最新技術情報の宝庫である「米国特許明細書」を読むのに抵抗感が無くなり、世界の最新技術を日常的に学ぶ姿勢がでてくると思います。例え英語が苦手でも悲観することはありません。

英語に転換できる日本語を日頃から意識すれば英語文章の構造が見えてきます。英語文章の構造をしっかりと理解して、英語へ翻訳しやすい日本語を書けば翻訳ソフトの支援が得られます。この繰り返しで、いつの間にか英語が身につくと思います。(2012/09/18)

【お礼】; 本書の発行に当たっては、一般社団法人 発明推進協会出版チームの渡邊 清隆さんには大変なご指導をいただきました。厚く感謝いたします。

## 【読後の感想を頂きました①】

アマゾンのカスタマレビューで、この本を読んで得られることは「何1つ」無いということで、「星1つ」を頂いています(笑)。著者は何が正しくて、何が間違いという結論は求めています。一人でも多くの方に読んで頂き、「文明日本語」の必要性についての議論が盛り上がることを期待しています。

下記のご意見は、理解ある読者から頂いたメールです。なるほど! 極めて分かりやすく、明快です。これで「モヤ~」が一つ晴れました。励ましをありがとうございます!

ところで、『特許日本語』の存在の件ですが、

- ・ 解釈論に持ち込むための法的立場重視から始まった技法が、
- ・ 「何としてでもコジツケしたい願望」に支えられて進化し、
- ・ これまで存在し続けることができたのであろう、と考えています。

結局のところ、

- ・ 「日本国内で、強みを構築する手段として使われてきた技」が、
- ・ 「これまではあまり翻訳されることのなかった他言語への翻訳」を通じて、
- ・ 「国際化にあたっての足枷」であると、多くの事例で明確に露見、発覚したということなのであろうと感じております (S: 2013/05/08)

## 【読後の感想を頂きましたー②】

我が社は中国出願で致命的な誤訳をした経験があります。原因を調べたところ米国特許出願も 同じ誤訳をしていました。つまり、「日→英」の翻訳段階で間違っていたので「英→中」の翻訳も間違えたと言うのが理由でした。

ほかの案件も気になって調べましたが、その結果、誤訳の原因は二つあり、一つは翻訳者の技術への理解不足、二つ目は「日→英」の翻訳段階での誤訳でした。後者（約7割以上）の理由が圧倒的に多いのに驚きました。対策として、「日→英」の誤訳問題は根が深すぎるので急遽の策として「日→中」への直接翻訳に切り替えることにしました。

ただし、翻訳者が理解できる明快な日本語で、日本特許出願明細書を書く、さらに不明な箇所があれば必ず聞いて確認を取るという条件をくわえました。

書籍の中で特許文書の構成は論理的に展開されており、文章は論理的に明快に記述する、という行がありますが、共感します。しかし中々難しい仕事ですね。また書籍の中で「日→英→中」の二重翻訳は、誤訳確率が高いと警鐘を鳴らしていましたが、これもその通りです。(H:2013/07/08)